
初めて恋をしました。

朱璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めて恋をしました。

【Nコード】

N0059BA

【作者名】

朱璃

【あらすじ】

出会いは、放課後の音楽室。

恥ずかしがり屋で内気な少女とクラスの中心的な少年の恋の物語。

13歳にもなつて初恋がまだな少女はある日、恋をしました。恋というものをしたことのない少女は、少しずつ初恋の想いを強くさせていくのです。

ピアノで出会った2人の成長を描いたストーリー。

1話（前書き）

久しぶりに投稿しました。読んでください

1話

私、西田　りか。ピアノがだい好き。まわりの友達も「りかのピアノは大好き」って言うてくれる。

私は毎日放課後に空いた音楽室のピアノを自由に弾いているの。今日は、昨日始まったばかりのドラマのメインテーマを弾いてみた。聞いたのをそのまま弾くだけなのに、とっても楽しい。昨日始まったドラマは「思い出」。内容は、主人公のゆきが小学生の頃に恋をした相手けいたに、高校生の夏たまたま出会ってしまう話。ありきたりな内容だけど私は恋をしたことがないから憧れてしまった。ドラマのメインテーマは、やさしいゆきの想いがそのまま、歌になったように切なくやさしい曲。曲名は「初恋」。

私は、初恋を弾き出した。止まらない、やさしい気持ちになる。私は、音楽室でピアノを弾いた。

楽しい時間はすぐに終わってしまう、十分にはまだ弾けてないのに下校のチャイムになった。私は、急いでピアノを片付け、鞆を持って立ち上がった。

ガタッ。

ドアの所に同じクラスの小川さんがいた。小川くんは、クラスの中の心的男子で明るく、静かで人見知りな私とは正反対の男子。私が、急いで教室を出ようとする和小川くんが「お前のピアノって心がこもっているな！」

と話しかけてきた。私は、恥ずかしくなって逃げてしまった。

2話

ああー。

私のほかあ。また、逃げてしまった。クラスの友達以外にはしつかりと喋ったこともない！私は、辺りを見回した。ここは、学校の近くの公園！

「おい、西田。どこだあ？」

この声は、小川くん。追いかけてきたあ。どうしよう、何で、どうして？私は、理由もわからずとりあえず隠れてみた。

小川くん、一生懸命に探してる。そんなとき、ブルル、ブルル。携帯にメールの着信音。すると、

「見つけた。」

目の前には、小川くんが。私の腕をつかんで顔を寄せてくる。そして、

「西田、何で逃げたの？」

私は、理由がないから黙っていた。すると小川くんが手を離してきて、話しかけてきた。

「怖がらしたなら、ごめん。でも、西田のピアノすげーよ。俺、ファンになっちゃいそうだ。心がこもっているから大好きな演奏だったよ。だから、だから見てた。」

私は、驚いた。小川くんが優しく笑ってくれるのが嬉しくて。私は、小川くんというドキドキした。小川くんの笑顔、かっこいいな。

3話

「はるー。おーい小川はるー。どこー？お母さん、心配してるよ。」
小川くんは、私に「ゆめが来た。それじゃ、またな」と言っ
ていった。さつき、小川くんを呼んでいたのは小川くんの幼馴染
みで家族ぐるみの付き合いをしているらしい（噂になっている）山
田ゆめちゃん。さばさばしていて、かわいくて明るくて小川くん
に
お似合いな女の子。

まだ、ドキドキしている。私は、家に帰った。

この気持ちがなんなのかわからなかった。私は、どーなったの？
私が悩んでいると、お姉ちゃんが入ってきた。3歳上のお姉ちゃん
は私と性格が正反対。小さい頃からすごく可愛がってもらっている。
そして、私が見たドラマのゆき役を演じている女優。お姉ちゃんは、
私の憧れ。相談にもよくのってくれる。お姉ちゃんは、私に「りか、
恋したでしょ。」と言ってきた。

私は、驚いた。恋なんて……。初恋もまだなのに。私は「わから
ない。」と言った。するとお姉ちゃんは、「りか、初恋だねえ。初
恋は楽しいよ。」そしてそれだけ言うと部屋を出ていった。

4 話

私は初恋をしたんだ。このドキドキした気持ちに恋なのかな？不思議だけど小川くんが頭のなかをぐるぐるしてる。

私は、小川くんの楽しそうな笑顔に惹かれた。一言が心の奥にしっかりと語りかけてくる。私は、次の日、早めに学校に行った。

授業が長く感じられた。そして放課後。私は、昨日の夜、自分の想いをいれた曲を作った。ピアノでひくと、心の奥から感動が込み上げてくる。

私が、何度も弾いていると、小川くんが「いい曲だな。誰が作った曲なの？」

と聞いてきた。私は小さな声で「私が作ったの」と言った。小川くんは「お前、すごすぎ。才能ありすぎ。やっぱり好きだわ」と言った。私は小川くんの言葉に切なくなった。やっぱり、私の事じゃなくて私のピアノだよね。」

私は、小川くんがすき

5 話

私は、小川くんが好きだけど、小川くんは私が弾くピアノが好きなんだ。想いが届かないのは、切ない。

気付いたら、私は泣いていた。

小川くんが「おい、西田？どうした？」

優しく聞いてきた。今は、見れない。のぞきこんでくる小川くんの顔が見れない。私は飛び出した。荷物も何も持たずに・・・。

私は、近くの公園で声を出して泣いた。どれぐらい、泣いたのだろう？泣き止んだ頃にはもう、薄暗くなっていた。

ガサッ。

小川くんが近づいて来た。

「お前、いきなり泣いてどうした？まじ、びっくりしたんだぞ。」

普通に話しかけてくれた、小川くんは私の鞆を持ってきてくれた。

私が泣いている間、ずっと待っていてくれたみたい。

優しすぎるよ！私はお礼だけ言った。

きつと、泣き顔で変な顔だったと思う。お礼を言ったときは顔が赤くなっていた。自分でもわかるぐらい。恥ずかしかった！でも、小川くんはとても優しくかった。

6話

次の日、私は親友のまゆに話しかけた。

「まゆ、私っておかしいのかな？最近変じゃない？」

私「まゆに言うと、

「そだね。まゆ、はるくに恋したもんね」

えっ？何で知ってるの？

「何で、知ってるの？」

私「言うとまゆは、笑って

「ばればれだよ」。多分、クラスのみんな知ってるよ。昨日ずーと、はるくん見てたしね」

まゆ「だけじゃなく、クラスのみんなって私、どんなに気付かれやすいの？」

私は、昼休み屋上に行った。ぽかぽかした日差しが大好きで晴れた日はよく行っている。

声がする。小川くんの声だ。もう1人は山田ゆめちゃん。仲が良さそう。楽しそうに話している。羨ましい。山田ゆめちゃんは、とても可愛いからファンまでいる。私とは正反対の女の子。そして、小川くんにお似合いの女の子。私は、静かにその場を離れた。

7話

私は、放課後音楽室に行かず家に帰った。

家に帰ると夜ご飯までずーとピアノを弾いた。自分で歌いながらピアノを弾くと悲しい気持ちが少し楽になった。

次の日の放課後、私は音楽室に行った。昨日自分で歌いながら弾いたピアノを演奏した。何もかも忘れられたみたいで幸せな気分になった。

どれだけ弾いたのかわからないけど、たくさん弾いた。楽しかった。チャイムがなった。
パチパチ。

拍手！？拍手をしてたのは小川くんだった。私は荷物を持って教室を出た。小川くんが「今の歌、すげーよ。今から時間ある？公園行こうよ」誘ってくれた！

私は、時間はあるから「時間なら大丈夫だけど」そういった。
そして、2人で公園に行った。

公園に行くと、小川くんが「昨日、俺とゆめが話していると聞いたでしょ。」

突然言ってきた。ばれてる！私は顔を赤くしてうつむいた。

8話

どうして、わかったのだろうか？

私は、小さくうなずいた。

小川くんがため息をついて話し出した。

「やっぱりな。だって屋上にお前のヘアピン落ちてたし。」

そういつてヘアピンを見せてくれた。

ヘアピンはさきっぱにピアノがついていて、私のものだった。毎日学校につけていつている物。

「小川くん、山田さんと仲いいんだね。」

私が喋ると小川くんが「まあな。家が近いし、親も仲いいし、兄弟みたいにそだつてきたからな。」

私は、下を向いた。すると小川くんが「西田って分かりやすいな。」

そんなにはつきりしてるところまで……。」ボソツ。

私は、小さく笑った。

小川くんがこっちを見た。そして、

「俺、ゆめとは兄弟みたいに接してるし恋とかそんな気持ちはないし。俺が好きなのは、西田だよ。西田の弾くピアノは心がこもっているから大好きなんだ。今日も弾いてただろ！歌も上手いな。昨日、音楽室で待つてたけど、来なかった。西田がいると自然にできるのに、昨日は変だった。まだ、初恋つてのがわからないけど、ゆめが教えてくれた。恋つてどんなものか。俺、西田が好き。お前が弾くピアノが、分かりやすい表情、全部、全部好きだ。俺と付き合つて！」

9 話

えー！。

小川くんが私のこと好きだって！

私は小川くんに「もしかして、私が小川くんの事が好きだってことも知ってたりする？」

私が聞くと、

「えっ？西田が俺のこと好き？知らなかった。」

私たち、お互い鈍いんだね。

「私、小川くんが好きなの。大好きなの。初恋なの。」

私が話すと、小川くんが顔を赤くして「両思いだったんだな。」

と言ってきた。私は小川くんとずっと一緒にいたらいいなと思った。

（2年後）

私たちは、三年生になった。私は、あの日から毎日欠かさずに音楽室に行っている。もちろん小川くんと一緒に。けんかもたくさんしたけどそのぶん仲直りもした。私は、小川くんが大好きなんだ。

受験は大変だけど、夢に向かって頑張ってる。

私の夢は、歌手になること。

小川くんの夢は、サッカー選手。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0059ba/>

初めて恋をしました。

2011年12月31日23時50分発行